

池田進一先生のご退職に当たって

加藤 理

豊かで幅広い教養を身につけ、孤高を保つ気高い存在、池田先生はそのような印象を周囲に感じさせる先生でした。

普段は寡黙な池田先生の教養の奥深さは、教職課程の懇親会の場で乾杯の音頭をとられる時などに垣間見ることができました。乾杯の音頭の際などには歌の一節を引用されたりしながら、実に味わいのある話をしてくださいました。

そうした池田先生の豊かな教養は、常人の及びもつかない豊富な読書量で培われたものだと思います。教職準備室で本の背表紙を裁断なさっている先生を、しばしばお見かけすることがありました。裁断の理由を尋ねると、本をデータ化して移動の合間などに読むのだとお話してくださいました。研究者としての時間が、先生の生活を支配していたのだと思います。

池田先生は、早稲田大学第一文学部をご卒業後、東京教育大学修士課程から筑波大学博士課程に進まれ、単位取得満期退学の後の1982年4月に文教大学に専任講師として着任されました。2005年4月には、大橋学長から教育学研究科設立準備委員長に任命され、教育学研究科の設立に関わられました。2007年4月に発足した教育学研究科の研究科長に就任、2009年3月まで務められました。同研究科では、「教育心理学特論」、「発達心理学演習」、および「論文演習」を担当し、修士論文を指導する主指導教員とこれを援助する副主指導教員を、それぞれ11名と5名受けもってこられたということです。

文教大学着任以来、実に40年の長きにわたり文教大学を支えてこられたことになります。その時間の長さ思いを馳せる時、文教大学の生き字引ともいべき先生が、また一人文教大学からいなくなってしまう寂しさを禁じえません。

1995年に「間接的要求における認知的処理機構」により筑波大学から博士（心理学）を取得なさった先生のご専門は認知心理学ですが、その中でも、人間が言語を使用することの意義を主要なテーマとして研究を深めてこられました。

現在の関心事は、日本で学力の低下と二極化が進行するなかで、日本社会はどのようにすれば維持できるのか、ということと、世界で温暖化が加速するなかで、人はどのようにすれば生存できるのか、ということだと先生からうかがいました。

先生は趣味も多様です。囲碁と将棋はそれぞれ4段の腕前。古今亭志ん朝などの落語鑑賞とJ. S. Bachなどのクラシック音楽を好み、さらに『源氏物語』や『太平記』などの日本の古典文学にも造詣が深く、四方田犬彦や丸谷才一、司馬遼太郎をはじめとして、ウエールズの言語学者D. Crystal、アメリカの人類学者J. Diamond、イギリスの社会学者A. Giddensなど愛読する著作も多岐にわたっています。その上、水泳も好まれるとうかがっています。先生の関心事はこれからますます広がり、果てしなく広がり続けるのではないのでしょうか。

先生のこれからの人生の弥栄を祈念し、感謝と御礼の言葉にかえさせていただきます。

(かとう おさむ 文教大学教育学部教職課程)

